

# 味読郷土の本

評者 小笠原千秋

(読書文化情報誌「ひまひま」編集部 山形市)

昭和初期、大井沢村（現西川町大井沢）には一人の医者もおらず、貧しい村の人々は“まじない”と“あきらめ”の中でどうにか命をつなぎ、その地に生まれ、医学を学ぶため東京で暮らしていた26歳の周子のもとに、故郷から「イソギカエレ」という電報が届く。

勉強も恋も半端にしたまま大井沢に戻った周子は、父親に懇願され3年だけという約束で村の診療所に務めることとなつた。今では「いしゃ先生は、神様だっけ」と村に語り伝えられている志田周子（1910～1962年）は、実在の人物。この小説は実話をもとに描かれており、来月には映画も公開される。

そんな風にとりあげられると、輝かしい女性のサクセスストーリーの一



あべ美佳著 「いしゃ先生」

## 不器用に傷つき、生きる姿

ようと思われるかもしれないが、映画の脚本も手がけた著者のあべ美佳（尾花沢市出身）は、あえて村の暗部も周子の未熟さも丁寧に描く。頼まれて乞われて故郷に戻つたはずなのに、周子にはなぜか村の人々から冷たい視線が投げかけられる。「丁前じやない女医者に、誰が命あずけられるか」「診療所なんて、わざわざ命縮めに行くようなもんだけ」。心ない言葉の数々は周子を苦しめ、追い打ちをかけるように身内に不幸が襲う。そんな困難をひっくり返すような大きな転機が訪れるわけでもない。けれど、彼女は決して不幸ではなかつた。なぜなら、村の中で生きることは自分で選び取った道だつたからだ。

無医村、貧困、村社会、情報リテラシー、女性に対する偏見差別。この物語には、現在にも通じる問題が渾然としている。そんな中で孤軍奮闘し、小さな村の中でも自分なりの戦い方を貫いた志田周子。この小説に描かれるように、周子は神様なんかではなく、不器用に迷い傷つきながらも自分の道をひたむきに生きた、一人の自立した女性だつた。だからこそ、その姿は今を生きる私たちの胸を打つ。この小説と映画のラストシーンは少し違つていて聞く。彼女の信じた道の先に何が見えたのか、スクリーンの中で再度確かめてみたい。